



『インフルエンザはなぜ流行するのか』

2009.9.7

▶ インフルエンザの症状

インフルエンザは、一般的に冬から春にかけて流行する呼吸器疾患です。病原であるインフルエンザウイルスは、ウイルスを構成するタンパク質の抗原性の違いによって、A型・B型・C型に分類されます。そしてインフルエンザウイルスは患者の咳やくしゃみなどの飛沫感染によって流行が拡大します。鼻や気管などの上気道に侵入したウイルスが1～2日ほどの潜伏期間を経て増殖し、**突然、急激な悪寒(おかん)や38度以上の発熱・筋肉痛・関節痛・倦怠感・食欲不振などの症状が発現**します。症状が進むと、咳や痰・咽頭部の腫れ・吐き気などの症状が出てきます。ほとんどの場合1週間程度の安静で回復しますが、重篤な症状になることもあります。その場合のほとんどがA型です。症状は同様ですが、A型の場合、全身症状が強くなるのが特徴で、数日間起き上がれないこともあります。また、高齢者や基礎疾患を持つ患者・乳幼児・小児・妊婦などのリスクの高いヒトでは肺炎・気管支炎などの合併症を併発し、死亡に至る危険性も高くなります。

▶ A型ウイルス

世界規模の大流行(パンデミック)となるのもほとんどがA型で、新型ウイルスとして登場するのもA型です。A型ウイルスは直径1万分の1mmの球形をしており、アジア型・ホンコン型・ソ連型などの種類に分けられます。A型の新型ウイルスの出現は、ほぼ10数年の周期で繰り返されます。

1957年にアジア型(H2N2)、1968年にホンコン型(H3N2)、1977年にソ連型(H1N1)が登場し、猛威をふるいました。1997～1998年にはホンコン新型が登場しましたが、大流行を起こすことはありませんでした。

▶ 予防するには

本来、トリ由来やブタ由来のインフルエンザウイルスはヒトには感染しないのですが、ヒトインフルエンザウイルスとの間で遺伝子組み換えが起きてしまうと、ヒトに感染するように変化してしまいます。これらが最近新型ウイルスとして登場しました。

予防にはワクチン接種が必要です。ワクチンは、病原体の毒素を弱めたり、病原体を殺して無毒化したもので、体内に接種して免疫を獲得させるものです。ワクチンはニワトリの卵を使って培養し、遠心分離機で沈着させて精製されます。精製品をエーテル処理で分解し、ホルマリンを加えて不活化します。一般的には4週間をあけて2回接種すると、通常、約90%のヒトに抗体上昇が見られ、その免疫効果は約3ヶ月持続します。また、うがいやマスク、手洗い消毒、人ごみに近づかないといった予防策も講じられていますが、どれも万全とはいえません。

日頃からインフルエンザの情報を活用し、冷静に、パニックに陥らないようにすべきですし、医師や医療機関の指示に従うことも重要です。しかしながら最後には、やはり個人の体力と免疫力の問題となります。食生活など栄養に気を配り、適度な運動や休息をとって、薬に頼らない体力作りを心がけることが重要です。

